子どもの生きがい

西本美節

真実こそわが友

これは、わたしの好きな言葉である。人はそれぞれこの世に生を受け、各人各様の人生を歩む。わたしの産んだ子どもでも、母体を離れるとともに、わたしのものではなくなる。彼は彼の天命のもとに、彼女は彼女の道を歩み始める。わたしが幼児教育に関心を持ち始めたのは、確か小学校五年生の時であった。が、それ以来、おとなになることを極度に恐れた。「子どもの心だけが真実を語る」ような気がしたからである。おとなになれば、心にもないことを言ったり、したりしなければならないだろう。それは、わたしにはとても耐えられそうもないと思った。しかし、いつまでも子どものままでいるわけにはいかない。幼児教育の道にはいって、早くも二十四年の年月が過ぎた。幸いに三人の子どもを与えられたが、今ではみんな青年期にはいっている。わたしは、子どもたちに特別何を期待しているわけでもない。大学で家庭教育の講義をしているが、子どもたちには、型にはまった人間を求めようとはしなかった。豆腐は四角でなくてもよい。丸くても三角でも、味わいがあれば、形は問題でない。わたしが絶えず真実を求めてさえおれば、子どもたちも、それぞれ異なった型であっても、真実を追求する人間に育ってくれるのではなかろうか。ひとりにただ一つしか与えられないかけがえのない命と、やり直しがきかない人生を大切にし、仕事に生きがいを感じてくれるならば、しあわせだと思っている。

大きかった長男

九十歳の曽祖母や祖父母・叔母が待つわが家へ、両親に抱かれて第一歩を踏み入れた。生下時体重三八五〇グラム、骨太、色白で、髪の毛のつややかな子である。わたしの体格のわりに大きな子で、三日間も陣痛に悩まされた。「眞理に生きよ」との願いをこめて、「眞」と命名した。おとなばかり六人の中で、みんなの愛情を一身に受けて育つ。「健康」という言葉は、この子のためにあるのではないかと思うほど、よく眠り、よく食べた。よく笑い、大声で泣き、満足するとケロリと泣きやむ。育児書にあるとおりに、すくすく成長した。

わたしが掃除している間は、じっと水そうの中の熱帯魚に見入る。ベッドに入れると、セルロイド製のくす玉の飾り糸を引っぱって、ゆれるたびに、キャッキャッと笑う。何もない時は、自分の手を明りに透かして指を動かしたり、足指をつかんだりして遊ぶ。人が近づけば、全身をバタつかせ、手を差し伸べる。泣いて抱かれようとはしない。泣く時は、泣くことに集中している。顔じゅう口にして目をつぶり、まっかになって泣くので、こちらのほうが手を出しにくい。十分くらい泣き叫んで気がすむと、〝アア、アア〟と自分の声を自分の耳で聞きながら、だんだん声の遊びにはいってしまう。添い寝をしようとすると、むずかって寝ない。ベッドに入れると腹ばいになり、すぐにスヤスヤと寝息をたてる。

一ヵ月もしないうちに「この子は、わたしとは別のひとりの人間なのだ」と思い知らされた。六ヵ月でつかまり立ちを覚えた。四日四晩、目が覚めている間じゅう立ちっぱなしである。わたしは付き合いかねて、寝てしまう。それでも本人は平気なもの。八ヵ月目には、二メートル四方のベビーサークルを引きずって自分の目的を達し、十ヵ月目にはサークルの棒を引き抜いて、囲いの外へ出て来るようになった。そこで、あぶない物を持って、わたしのほうがサークル入りをすることにした。また、たんすの引き出しを階段にして登り、上の物を取る。引き出しの金具に二尺ざしを通し、ひもで結んであかないようにすれば、縁側からいすを運んでくる。大きなたらいを頭からかぶって歩き回る。毎日、母と子の知恵比べである。はさみや、のこぎり、やかんなどを持って危険ないたずらをするときは、きまってそれをたたきながら持って歩く。愚かなわたしは大助かりである。ミシンを踏んでいるときは、けっして手を出さない。動く車や針を食い入るように見つめる。ミシンが止まると、手を出し、動かしてためす。置き時計はたちまち分解されてしま

う。そして〝アーア〟〝ドウゾ〟と持って来るのだから、しかるわけにはいかない。床の間の置き物のコイや鳥は、いつも同じ場所にいたことがない。しかし、台を傷つけたり、こわしたりするわけではないから、しかれない。祖父は〝このコイは生きてるな〟と眞を見て言う。〝ウン〟こっくりとうなずく。

十ヵ月には歩き出し、寒中でも帽子だけかぶって、素っ裸になって日光浴をする。せっかんされていると誤解した近所のおばさんは〝何を悪いことしたのだろうね。かわいそうに〟とむすこに同情する。本人は日だまりにいて、汗ばんでいる。犬小屋へはいり込み、犬を追い出す。小屋の中を金づちでたたく。大工さんごっこだ。左手がきく。おもちゃは左手で持ったり並べたりする。スプーンやフォークは、右のほうへ置くと右手を使う。力がいるときは、左手を使うようだ。育児とはこんなにおもしろいものなのかと思う毎日であった。からだが大きくなりすぎたが、止めようがない。満一年で三歳の大きさである。薄味であれば、なんでも食べた。三歳のある日、この子を連れてバスから降りようとした。〝うそつかんと、この子のバス代払いなさい〟と車掌にしかられた。〝まだ三歳だ〟と言っても、六歳児の体格をしているのだから、疑われるのも無理からぬことだ。〝ボク、三ッチュヨ、コイダケ〟と指を出されては、しかたないから降ろしてくれた。それでも、疑い深いまなざしで〝今度から払ってくださいよ〟と言われた。これからは戸籍抄本でも持ち歩かねばと思いつつ、生年月日入りの「迷い子札」を作らせることにした。

小さかった次男

五年間待って、やっと生まれた次男。片方の手のひらに乗る、子ネコほどの未熟児である。七ヵ月の早産児、生下時体重一二五〇グラム。〝せめて一五〇〇グラムあればね……〟という医師の診断である。両方の指はマッチ棒を並べたようで、耳は桜紙を付けたようであった。夫はそのころ、ちょうど未熟児の研究のさいちゅうであった。未熟児の不幸については、いやというほど見せられていた。生後一週間以内で八五パーセント死亡、残りの一五パーセントも一年以内に……。能力の発達については見込みがない。「欲は言わない。せめて命だけでも、一日でも長く」と祈るよりほか、なすすべはなかった。

三つ子が育つほどたくさん出る母乳を絞る。絞りきれず乳がたまる。乳腺炎を起こしたら、この子は育たない。どうしても母乳で育てようと、一日じゅう絞り続ける。一回に飲む量は五CC－一〇CC、それも細いカテーテルを通して、注射器で二、

三十分もかけて胃へ送り込む強制栄養である。一日に十三回。保育器の中の子が、日に日に小さくなる。一週間目に〝チアノーゼです。お父さんを呼ばれたら〟と医師から言われ、夫に電話をするが声にならない。覚悟はしていたが、思い切れない。まっ白なシーツの上の子は、全身土色をしている。肺炎併発。大きくふくらんだおなかだけが、かすかに動いている。「生きていてちょうだい。生きててよ」と祈るうち数時間がたった。土色が消えうせてはだ色になる。一命が助かった。〝強いぞ坊や〟ずっと付き添ってこられた若い医師の髪にはあぶら気もなく、無精ひげが見える。美しい婦長さんの目もくぼみ、くまができている。申しわけない。ありがたいことだ。望みをもって育てよう。どんな困難があっても、希望をもって歩むように、「望」と名付けた。わが家のホープ君、だれからも愛されるノンちゃんである。

やがて、わたしだけ退院する。そして、一日中乳を絞り続ける。それから毎日、家から病院まで往復一時間の道を、日に四回も五回も、絞った乳を魔法びんに入れて運ぶ。祖母・祖父も、父も、幼い五歳の兄も、交替で運ぶ。〝ノンちゃんのお家のかたには負けてしまいますわ。お家のかたを見ていると、ノンちゃんのために徹夜しても育てなければ……〟と婦長さんは言ってくださる。

退院後三週間めから、わたしは毎日病院へ通う。二時間おきの授乳のために。生後三ヵ月が過ぎた。初めてこの手に抱く子、グニャグニャと柔らかく軽い。その口に乳ぶさを当てがう。乳がほとばしり、口からあふれる。ゴクリと飲み込む。涙がほおを伝って流れる。一〇グラム飲んだ。上できだ。

いよいよ退院に決まる。〝今、正直に申しましょう。坊っちゃんは心臓が悪いようです。育てられても三年か、長くて六年間でしょう。それ以上は、からだの大きさに心臓が耐えられなくなるから無理です〟と、気の毒そうに言う医師の言葉に、たとえ一年でも半年でもいい、一緒に暮らすことができれば、こんなしあわせはない。もし六年間も育てられれば、もったいないくらいだとさえ思った。乳を飲むたびに、ゼーゼーと心臓をならし、噴水のように乳を吐く毎日が続いた。それでも、わたしは生きていることに満足した。からだの調子が落ち着いたときは、ボツボツ知恵づきがみえる。日光浴をすれば、足をバタつかせて、声をたてて笑う。大きなおでこが父親そっくり。ときどき、ひょうきんな表情をして、皆を笑わせる。吐くくせによく食べ、ゼーゼー心臓をいわせては、どんぶり鉢に吐き出し、また食べ直す。全部食べ終わると、いたずらを始める。サーク

ルにあるカギのネジくぎを、つめで廻して抜く。はい出しては、引き出しの中味を全部引っ張り出して散らかす。畳のみぞに指を突っ込んで、ゴミを口へ入れる。マンマもブーブーも言わぬ先に、第一声が〝ケテー〟（戸をあけての意）と呼ぶ。〝チョーダイ〟必要な言葉しか言わない。一年三ヵ月には歩き始めたが、自分の足の影を踏もうとして、なんどもひっくりかえる。影を取ろうとして、床をガリガリひっかく。

少しむし暑いつゆのある日、二、三日吐くことも少なくなり、きげんがよいので、生まれて初めて髪にはさみを当てた。しまった。しかし、すでに遅い。ぜん息の発作が始まった。ごめんね、望君。カールした薄い髪の毛など伸びていてもよかったのに、ついうっかり切ってしまった。薬も受けつけない。口からあわまで出して、苦しそうだ。それから三日間、乳も飲めない。〝エフェドリンは赤ちゃんには使わないのですがね。しかたないから少し使いましょう〟注射でようやく乳だけ飲めるようになった。また母乳だけの生活に舞いもどった。

ひとり娘

出産予定日が過ぎた。ああよかった。これで普通の子が生まれると喜んだ。しかし、予定日を二週間も過ぎた。病室があわただしい。きょうもまだかしら、早くしないと年末になり、大へんなのに。ところが、たいへんなことになった。妊娠中毒症、高血圧（二六〇）、心音停止。注射を打たれた。〝手術です〟どうしてかしらと思う間もなく、意識を失った。〝お母さんだけはなんとか努力して助けましょう。赤ちゃんはわかりません。覚悟してください〟そう告げられた夫はどんな気持ちだったろうか。帝王切開、臍帯てん絡、仮死で生まれた。思いがけない経験だ。初対面の娘は、こけしのようなまん丸い顔に、深いえくぼを作って、あいきょうを振りまく。まだ目が見えないのに見えるような顔つきで、人びとの心を満たしてくれる。心の美しい娘になって、多くの人びとの心を満たしてちょうだい。美しさに満ちあふれた娘に育つよう願い、「満美」と名付けた。いずれマミー（母）になるのだから。貧血がひどいので、増血剤を飲ます。薬で口の中がしぶかったのか、指を二本も吸い出した。人形を持たせても、遊んでいても、絶えず二本の指は口の中である。指先は白くふやけて、湯気がたつ。気づかれないように、用事をさせたりしたが、いっこうにきめがない。自分で気がつくまで、心にわだかまりが残らぬよう、気にしないことにした。

だれからも一度で名まえを覚えられ、好かれた。人なつっこ

い目でニッコリ笑う。いつもきげんのよい娘である。六ヵ月め、長兄の誕生日に、いすに腰掛け、家族の仲間入りをさせた。カルピスをみんなに配っていたときである。突然彼女は立ち上がり、〝アミ（マミ）モー〟と主張したのである。ウックン、ブルブルブルしか言わなかった娘の、初めての言葉に、一同あっけに取られてしまった。それ以来「主張女史」と呼ばれた。

やりたいことは好きなようにやる。歩けるようになると、大きなバケツの水を指ですくってなめる。しかろうとすると、例のえくぼをつくって、ニッコリとし、出ばなをくじかれてしまう。長兄の絵の具を食べて、口じゅう緑色にしてニッコリ。口紅で顔じゅうに描き、鏡を見て〝コワイ〟と泣き出す。掃き寄せたごみを、ちり取りを取りに行っているちょっとの間に、ほうきで散らかし、〝ジョウズデチョ。オテチュダイ、チタノヨ〟と。ごみを移動させるのがそうじだと思っているのだから、しまつが悪い。〝ごみはね、こうして寄せて、ポイと捨てるのよ〟〝ゴミ、ポイネ。オチョージ、ママ、ジョーズネ〟恐れ入る。しかる元気もなく〝あーあ〟とため息をついたら〝ママ、タイヘンデチュネ〟とくる。この小悪魔めと、にらめつけたら、〝ママ、ツキ（好き）ヨ〟とくる。〝ママ、ホーキカタヅケテアゲル〟ほうきを持ってさっさと走って行った。

〝ぼくうれしいナ〟

幼稚園から帰った眞とわたしの話（年中組のとき）。〝オ母サン、ボク、ウレシイナ〟〝何が〟〝今度クリスマスニネ、オ日サマニナルヨ〟〝よかったね、どうしてそれがうれしいの〟〝何モ言ワナクテイイシネ、オテテ上ゲテ、キラキラサセレバイイモノ。楽隊ノ指揮モスルヨ。オ客サン見ナクテイイデショ。ウシロ向イテルカラ〟劇のせりふを言わなくてよいし、器楽合奏のとき後ろ向きでよいから安心だというのである。

大きなずう体に以合わず気が小さい。やはり「カエルの子はカエル」だ。照れ屋の夫と、内気なわたしの子だからしかたがないだろう。年長組になった二度目のクリスマスのこと。〝ボク語り手ダヨ〟聖劇の第一場の説明役になった。それは、相当に長い文章だ。担任の先生から〝クラスで、眞君が一番字を読めないですよ。十三字だけです〟と言われた。姓名を表わす七字のほか、六字だけである。しかし、文字の学習は、小学校にはいってからでもおそくはないと、わたしたち若夫婦は気にかけなかった。一字一字は読めなくても、通園途中の駅名はわかるし、絵本の文章も暗記している。クリスマスの当日、休んだ友だちの代役として、第三場の語り手もやらしてもらった。器

楽合奏では、大太鼓もまちがわずにたたけた。もう人前でも、はにかまずに表現するようになった。わがままで個性の強い子ではあるが、よい先生に恵まれて、気弱さもなくなり、しあわせな幼稚園生活を送った。

〝幼稚園行ったれへん（行ってやらない）〟

寿命の短い子ならなおさら、少しでも早く友だち仲間の楽しい生活をさせてやろうと、望は、家の近くにある幼稚園の三年保育に入れた。ある日、突然〝ボク、アスカラ幼稚園行ッタレヘン〟と、プンプンおこっている。〝どうして〟〝先生オコッタラアカン言ウトイテ、自分オコルモン。センセ、マチゴートルカライヤヤ〟どろんこ遊びをしかられた不満である。〝ノンちゃん、悪いこととして、しかられるのは当り前よ〟〝ソンデモ、オコランカテエエヤ、話シテクレタラ、ボクヨウワカルンヤカラ〟どうしても、行くのはいやだと言い張る。気が強いというか、いったん言い出したらあとへ引かない。翌朝、わたしが先生に話すことで、やっと出かけた。先生も、強くしかるつもりではなかったが、約束を破ったことを話され、望も話してくれるならと、再び幼稚園へ行き出した。しからぬ教育はできるものだ。

〝ママ、どうして涙が出るの〟

満美がかわいがっていた子ネコが死んだ朝のことである。〝ママ、ドウシテ涙ガ出ルンデショ。マミノ目カラ止マラナイノヨ〟と、じっと目をすえて、涙をこらえている幼い娘。〝ルミエール（ネコの名）も、きっと天国へ行くわよ。心配しないでいいのよ〟〝ウンワカッテル。デモ、ルミエール、モウ冷タクナッチャッタ〟食事もせずに、幼稚園へ出かけた。大粒の涙がほおを伝っていた。

長男の眞は、あと数ヵ月ではたちになる。彼は真理を求めて、自ら進むべき道を選んだ。六年間の寿命と宣告された望は、はや十三歳になり、医者を目ざしているし、満美は思春期を迎え、目下宝塚に夢中になっている。かくして、子どもはひとりひとり親元から巣立って行く。

（神戸常盤短期大学）